

研究ノート

歴史的庭園と学校教育 (その2)

— 子ども達と歴史的な庭園の関わりの視点から —

植村秀人^{1*}, 永松義博²南九州大学¹ 教養・教職センター 教育学研究室; ² 環境園芸学部 環境園芸学科

2016年10月1日受付; 2017年2月1日受理

Historical Gardens and School Education (Part 2)

From the viewpoint of the relation of elementary school students and the historical gardens A Case Study of Uyanagi Elementary School in Yatsushiro City, Kumamoto Prefecture

Hideto Uemura^{1*}, Yoshihiro Nagamatsu²*¹Laboratory of Pedagogy, ²Faculty of Environmental Horticulture, Minamikyusyu University,
Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan*

Received October 1, 2016; Accepted February 1, 2017

This study examines the educational value of historical gardens. A questionnaire survey was administered to elementary school students to assess their involvement with historical gardens in daily life. The results revealed that students in higher grades had a greater degree of involvement with historical gardens than those in lower grades. Moreover, an analysis of students' ways of involvement confirmed the educational value of historical gardens, not only for environmental study but also for subject study related to hometown education, physical education activities, and expressive activities. However, aspects such as the relationship with academic ability, the establishment of relevance with subject study, reasons for graduates' sentiments toward historical gardens, and the application of findings in community development were identified as challenges for the future.

Key words: historical gardens; elementary school; school education; biotope; period for integrated studies.

1. はじめに

(1) 研究の背景

現在の学校教育は、平成8年の中央教育審議会(以後、「中教審」と表記) 答申、それに伴う学習指導要領改訂により新しい方向に向かっている。現在の学校教育の改革は、従来の知識詰め込み型教育から、自身の有する知識をどのように問題解決などに生かすかに重点が移っている。つまり学校教育は、この資質・能力を育てることに主眼を置いたものへと変化している。それは、後の中教審答申¹⁾において「知識基盤社会」という概念が登場したが、これにより明確化してきたと思われる。この一連の改革によって登場した「総合

的な学習の時間」(以下、総合学習と表記)は、種々の批判はあったが、そのさきがけとしての機能を果たしたと考えられる。総合学習は、各学校において学習内容を設定することに特徴がある。学校や教師が、学校・地域の特徴・課題などから教育課程を設定することも可能となった。このことは、学習指導要領が教育課程の基準となり、教育内容の統一化が進んだ日本の教育において画期的な変化である。

総合学習には、複数の教科やその他の教育活動における学習を発展的に展開し、教科間・教科とその他の教育活動、その他の教育活動間での学習を統合し昇華する役割もある。これは、合科学習的な側面として指摘できる。このため総合学習は、知識基盤社会を目指す現代の教育において、中心的な教育活動となる可能性を有した教育活動である。さて、学校が自由に教育内容を構築できる

*連絡著者

ことは、今まで学校における教育題材として着目されてこなかったものが、学校教育において新たな題材として活用される可能性を生み出すことになる。

本稿では、これまであまり着目されてこなかったであろう、歴史的な庭園を対象としてその教育力を明らかにしたい。庭園を、学校教育の視点から見たとき、どのような価値があるかについて、検討を行なうのが本研究の目的となる。ここで庭園は、子どもの成長に大きな影響を与え、学校における教育活動へ貢献する可能性があるのではないか、という仮説を提示したい。庭園の作庭目的は、住居などの敷地に緑地を設けることで居住する人や訪れた人の心を和ませること、庭を設けることで住環境の改善を計ること、茶道などの文化活動の拠点となること、生活に関わる資源を得ること²⁾などの理由が推測される。一方で、教育的な目的は含まれていなかったと思われる。

庭園は、人により野外に植栽・石・池水などを組み合わせて設けられる。歴史的な庭園は、長い間継承されて今にいたっている。これら庭園は、当時の時代の社会情勢や文化を踏まえて作庭されたものである。当時社会が、創造してきた文化が形となって現れていると考えられる。歴史的な庭園は、作庭された時代の歴史情勢や文化を維持し現代に継承してきたことになる。

また、庭園は、人工物であるが、自然環境からの影響を受ける中で調和・融合していったことを忘れてはならない。庭園には、池泉が設けられ、植物が植栽される。当初は、人工物であるが故に自然の摂理から不自然な状況であったかもしれない。しかし、長い年月の中で、石物などの風化・木々の成長・生き物が根付くなどにより、より自然環境に準じた形態への調和が進んで行くのである。このような歴史的な庭園には、自然環境としての要素がある。そして、本来の目的ではないが、近年環境教育の場として登場したビオトープなどの機能も有していると考えられる。また、歴史的な価値も含めて考えれば、歴史的な庭園には学校教育において有効な役割を果たすと思われる。

これらのことから、筆者らは、庭園の学校教育との関わりに着目することにいった。本稿では、この視点から庭園と学校教育との関係について検討を行なうものである。例えば、作庭後一定期間経過した庭園は、環境教育の場として、特にビオトープとして運用が可能ではないかといった着想から本稿は出発している。筆者らは、既に校内に庭園のある学校を対象に研究を行なっている³⁾。今回は、先行して実施した研究を継続し、歴史的な価値を有する庭園についてさらに研究を深めるものである。作庭間もない庭園は、人工物としての側面が強く、自然環境との調和が進んでいない。また、企業や個人所有の場合は、利用が当然制限される。歴史的な庭園は、作庭から一定期間を経て自然との調和・融合が進んでいる事を指摘した。このことは、学校教育における理科や総合学習での理科教育や環境学習などの学習の場・題材として非常に有効な存在となる。

(2) 研究の目的

歴史的な庭園の学校教育における活用は、活発に行なわれているとは言える状況下ではない。これは、既

に述べたように歴史的な庭園と学校の距離が遠いことが第一にあげられる。これに加えて、学校現場における実践としての蓄積が出来にくい課題が挙げられる。これは、学校との距離が離れている歴史的な庭園が多いことから、歴史的な庭園を学校教材として積極的に活用する環境にない。さらに、歴史的な庭園を教材とするには、庭園学・歴史学・生物学などの学術的な基礎知識が必要と同時に、対象とする歴史的な庭園の歴史経過・価値や自然・文化的な特徴についての理解が必要となる。しかし、これら知識・理解は、教員養成の教育課程の中で備えることは困難である⁴⁾。このため、教育実践への活用は、何ら先行的な事例がなく、一から作り上げていく必要がある。このことは、教員の負担は大きく、現状の学校教育における状況では、教育実践としての構築を進める上での課題として考えられる。

これらのことを踏まえ本研究では、歴史的な庭園が子どもの発達や学習にどのような影響を与えるかについて着目したい。日常的に子どもが庭園に関わることで、どのような学習実践に繋がるかについて検討をすることが、優先されるからである。このため、今回はアンケート調査を行ない、子どもと庭の関わりやそこからどのような学習へ発展するかについて、その可能性を検討するものである。

(3) 研究対象の選定理由

歴史的な庭園は、有力者の邸宅、城郭、寺社などに作庭されたものが現存しているものである。当然、非公開となっている庭園や利用に制限がなされている庭園もある。長い歴史の中で、そのまま寺社が保存した庭園、個人所有から財団・自治体などに譲渡され、公園などの一部として社会一般に公開された庭園もある。しかしながら、学校教育の観点からは、学校から離れた寺社や公園の庭園を活用することは、時間的な観点・安全上の観点から多くの困難を含んでいる。このため、学校の敷地の一角に保存された庭園に着目し分析を行なうことにする。

研究の対象としたのは、熊本県八代市立植柳小学校の栽柳園である。栽柳園は、肥後細川藩の筆頭家老松井家の別邸として造成された庭園である。庭園部は、堤防工事による縮小や経年変化による変質はあるが、そのまま継承され当時の面影を残している貴重な庭園である。明治中期以後邸宅跡地は、植柳小学校校地となっている。このことは、子どもと歴史的な庭園の距離が近く、子どもが日常的に歴史的な庭園に関わっていることになる。今回は、この庭園について、これまでの研究を含めて子どもがどのような関わりを持っているのか。また、この関わりから子どもの成長にどのような影響があるかについて、明らかにすることを目的としている。

2. 栽柳園・植柳小学校の概要

(1) 栽柳園の概要

栽柳園は、2つの築山と2つの池泉を中核とした庭園である。2つの池泉は、園北側を流れる球磨川から引

水を確保していた。庭園は、その球磨川や奥にそびえる九州山地を借景とした、勇壮な庭園であったと記録がのこっている。この庭園は、市の指定文化財となっている。しかし、小学校が移転し校舎などが建築されたこと、球磨川の氾濫対策による堤防工事により庭園面積が縮小している。池泉への引水もなく、湧水がわいている状況である。また、これら堤防工事により借景は、失われてしまっている。近年では、体育館の焼失により再建された体育館が、栽柳園中核部となる池水や築山側に移転している⁵⁾。しかしながら、近年では地域住民による奉仕活動が行なわれるなど、庭園の保存が行なわれるようになってきている⁶⁾。

(2) 植柳小学校の概要

植柳小学校は、八代市立の小学校である。小学校校地は、球磨川左岸に位置している。八代市中心部からは、球磨川の対岸、中州の麦島を挟んだ南側の岸辺に位置している。江戸時代においては、八代城城下に含まれておらず、近郊の農村部であったと思われる。また、地区内には、熊本内陸部にあった人吉藩の蔵屋敷があった。球磨川は、人吉藩の輸送手段となっており、海洋への玄関口としての機能を有していた。植柳小学校は、明治7年植柳村立の小学校として創立された。当初は、前述した人吉藩蔵屋敷跡を校地とし、蔵跡を校舎として利用していた。その後、現在地の栽柳園へ移転し、現在にいたる。この期間には、球磨川の中州地区の麦島小学校との合併・分離も生じている⁷⁾。植柳地区は、文化面でも社会面でも特徴ある地域である。文化面では、植柳盆踊りという特徴的な盆踊りが継承されており、小学校を会場に毎年行なわれている。社会面では、地方だけでなく国政における議員も輩出する地域であった。なお、大正14年には洋式の鉄筋コンクリートの講堂が設けられるなど、歴史的庭園があるだけでなく、特徴の多い小学校である。アンケート調査を行った平成28年度の児童数259名(表1参照)・教職員24名の小学校である。1～3年生は2クラス、4～6年生は1クラスとなっている。植柳小学校の特徴としてもう1つが、体育活動である。運動競技において優れた成績を取めていることがあげられる⁸⁾。

(3) 栽柳園が小学校内にある理由

栽柳園は、細川家筆頭家老の松井家の邸宅である。松井家は、細川家の肥後転封以前から仕えており、細川家重臣であった。後には細川家より養子を迎えている。さらに細川家家臣でありながら室町幕府の時代に足利氏から所領を与えられ、江戸時代にも所領している。このためか、徳川将軍家にお目見えが可能であるほどの高い家柄であった。その後、明治時代には華族に列せられている。松井家は、家柄は相当高いことが推測される⁹⁾。この松井家は、八代市の現在市街地

中心部に位置する八代城を細川家から預かり、城代として居城していた。現在の熊本県南部を統治し、南に位置する薩摩藩島津家の監視の役割も担っていた。

栽柳園は、旧八代城(元八代市市街地)からは、球磨川およびその中州である麦島を挟んだ対岸に位置している。栽柳園は、現在の植柳地区に造成されていた邸宅及び庭園の呼び名であった。この屋敷及び庭園は、江戸時代終盤には造成されていたと考えられる。江戸時代には別宅として用いられていた。その後、明治初期には、廃藩置県により城を出た松井家一族が邸宅としていたようである。しかし、やがて邸宅を、城下へ移築し、それに応じて松井家一族は城近くへ転居することになった。つまり邸宅跡には、栽柳園の庭園部のみが残されることになる。当時既に植柳地区¹⁰⁾には、植柳小学校が創立されていた。植柳小学校は、球磨川上流に所在した人吉藩の蔵跡を校地としており、蔵を校舎として改築し子どもの教育を開始していたのである。その後小学校は、蔵跡より栽柳園へ移転することになった。移転に際しては、校地の確保のためなどに栽柳園の庭園部を更地にするようなことはなく、栽柳園が保存されるような形での移転となっている¹¹⁾。このため貴重な庭園が残され、後世に残されることになると、同時に植柳小学校の象徴としての価値を有することになる。

3. 歴史的庭園の教育的可能性

(1) 学校における庭園の教育的機能

小学校の庭園には、学校環境の改善や理科などの学習における教材や題材の提供などの機能がある。学校に緑があることは、学校の環境において重要な要素である。なぜなら、学校空間において緑がない場合には、無機質な人工空間しか残らないからである。学校における緑は、失われつつある自然環境を子ども達の身近な場所に重要な存在となっている。

現在の子どもは、自然体験が不足していることが以前から指摘されている。人口の都市部への集中により、自然環境の豊富な環境でない地域で暮らす子どもが増えたこと、学習塾など習い事などに時間を取られる子どもが増えてしまったことが背景として考えられる。また、自然環境が豊富な地域でも子どもがテレビゲームといった遊戯に熱中してしまうといったことも考えられる。これらのことから子どもの自然体験が不足しているのである。また、このことは、子どもの体力形成にも悪影響を与える事になる。

これまでの研究では、歴史的な庭園は、学校教育において多様な価値があることを指摘した。その中でも歴史的な庭園には、ビオトープとしての要素が含まれていることを明らかにした。また、造園業者が、昔から蓄積した管理に関する専門的な技術を持っていることから、歴史的な庭園はビオトープとしての管理が容易となり、効率的に活用できると考えられる。また、歴史的な庭園の背景にある文化や歴史の学習なども加味すると多様な学習へ繋がる可能性を秘めていることも指摘されている¹²⁾。

表1. 植柳小学校児童数

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計
人数	47	41	55	40	38	38	259

(2) 栽柳園の教育的な機能

植柳小学校・八代市の小学校における栽柳園の教育的な価値について考えてみる。4つの観点から教育的な活用が期待できると考えられる。それは、環境学習、郷土学習、体育活動、表現活動の視点である。

環境学習は、歴史的な庭園のビオトープとしての機能があげられる。自然体験等を通して、理科教科や総合学習・特別活動などの学習への教育的な効果である。植柳小学校は、八代市街地内に位置している。学校周辺は、市街地内の住宅地である。住宅地内は、庭や家々の間に植栽などがなされており、緑豊かな地区ではある。また、球磨川左岸に位置しており、球磨川やその河原などの自然環境は備わっている。しかし、植柳小学校近隣の河川敷は自然体験する場として十分に整備されてはいない。このため、子どもたちの安全確保の観点からも制限されている。また、個人所有の民家は、自然体験の学習などには使用できない。このため、植柳小学校周辺における自然体験の機会も、決して豊富な状況にはないと思われる。このため、栽柳園は、池泉の周囲は安全上立ち入りを制限しているが、周囲の植物などにより構成された自然環境は環境学習に大きく貢献することが考えられる。

郷土学習は、さらに地元の歴史学習と文化学習に分けることが出来る。地元の歴史学習は、八代市の歴史を学ぶ上で栽柳園は貴重な教材である。現在の八代市は、江戸時代細川家の重要地として位置付けられていた。このため、前章で指摘したとおり、縁戚関係にあり細川家の筆頭家老でもある松井氏に八代城を預けている。そして、八代城を中心として町が形成され、この町が現在の八代市の基礎となっているのである。栽柳園は、この八代市を統治していた松井家の庭園であり、この庭園を題材にすることは、八代市の歴史を学ぶことにつながる。また、子どもたちにとっては、栽柳園は自分たちにとって身近である校庭の庭園であり、学習の導入において有効であると考えられる¹³⁾。また、文化学習は、栽柳園を通して地域の文化などを学ぶきっかけになると考えられる。植柳小学校区は、植柳盆踊りの伝承など文化活動も盛んな地域である。栽柳園を学ぶことは、この文化的な地域社会の環境を次世代に継承していくことになる。

体育活動は、自然環境が豊かな環境であれば、子どもたちが野外に出ることを促し、そして何かしらの活動を行なうことで運動能力の向上などに寄与することが期待できる。また、表現活動は、庭園を作文などに文章として文章すること、絵画などに描くこと、庭園で採集した木葉花などを利用して工作を行なうことなど庭園を利用した表現活動を行なうことで国語や図画工作分野の能力向上が期待できる。

4. アンケートの調査とその分析

(1) アンケート調査の概要

アンケートは、子どもの学校内における歴史的な庭園との関わりに着目して構成した。学校の休み時間など日常生活の中で、庭園とどのように関わっているか

について質問した。アンケートは、植柳小学校の協力を受け平成28年9月に実施した¹⁴⁾。アンケートは、植柳小学校在学中の4年生以上の児童計116名を対象に実施し114名から回答を得た(表2参照)。アンケートは、各質問において「ある」「ない」の選択肢から選択する方式とした。質問3以外の質問は、2つの選択肢から該当項目を1つ、質問3は6項目から該当するもの全てを回答する方式にて実施した。なお、アンケートは、4年以上に限定し実施したが、その理由は植柳小学校での一定程度の学校生活を経験している児童を対象にすることにしたためである。

(2) 質問の内容と意図

本研究を実施するにあたり、これまでの研究を踏まえ質問1から質問9までを構成した。質問は、次のような意図で構成している。事前の学校調査において学校の教育課程として取り入れることに課題があることが明らかとなった¹⁵⁾。このため、アンケートは、子どもが休み時間など学校生活の中で自由な時間において、庭園とどのようなかかわりを持っているのか、子

表2. アンケート回答者の内訳

学年	4年		5年		6年		合計
性別	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
人数	20	19	21	17	24	13	114

資料1. 植柳小学校児童向けアンケート

アンケート

学年 _____ 年 性別(せいべつ) _____ 男子 ・ 女子 (○をして下さい)

これから、みなさんの学校での活動について質問します。あてはまることに○をして下さい。

質問1 自然の中でよく遊んだりしますか。 _____ ある ・ ない

質問2 休み時間は校庭でよく遊びますか。 _____ ある ・ ない

質問3 休み時間はどこで過ごしますか？場所を教えてください。
(当てはまる場所に○をしてください。○は、いくつでも良いです)
【グラウンド ・ 厳櫃(いずかし)の森 ・ 旧講堂(きゅうこうどう)の周り ・ 体育館の周り・榮山(つきやま)の周り ・ 中庭】

質問4 校庭で植物やこん虫を観察したことがありますか？ _____ ある ・ ない

質問5 校庭で植物やこん虫とったことがありますか？ _____ ある ・ ない

質問6 校庭で拾った木や葉っぱなどを工作などの材料に使ったり、花束などを作って遊んだりしたことはありますか？ _____ ある ・ ない

質問7 学校の自然について、作文や日記に書いたことはありますか？ _____ ある ・ ない

質問8 植柳小学校の栽柳園(さいりゅうえん)の歴史について少しでも知っていますか。 _____ 知っている ・ 知らない

質問9 栽柳園やその周りの風景を絵にかいたことはありますか？ _____ ある ・ ない

質問は以上です。ありがとうございました。

どもが自由に課題を選択できる日記や作文・図工などの創作活動に着目して実施する。なお、質問用紙及び質問内容は、資料1の通りであり、各質問事項の意図は下記の通りである。

① 質問1 自然の中でよく遊んだりしますか。

質問1は、子ども達が、日常生活の中で、自然との関わりがあるか、そしてどれくらいの子どもの関わっているかについて知るために設定した項目である。

② 質問2 休み時間は校庭でよく遊びますか。

質問2は、子ども達の小学校における休み時間の過ごし方の把握を目的とした質問である。休み時間に外で遊ぶ体験をしているのか、子ども達が学校生活の中で庭園と実際に接しているかを明らかにするものである。

③ 質問3 休み時間はどこで過ごしますか？場所を教えてください。

質問3は、質問2からの発展である。子ども達の小学校における休み時間の過ごし方の把握を目的とした質問である。休み時間に外で遊んでいる場所について、グラウンド・^{いすゞ}厳櫃の森・旧講堂周囲・体育館周囲・築山周囲・中庭から複数回答可で質問した。この質問では、外で過ごしている場合の場所を把握する事が目的となっている。このことで、子ども達が学校生活の中で庭園とどのように接しているかを明らかにするものである。

④ 質問4 校庭で植物やこん虫を観察したことがありますか？

質問4は、著者らの先行研究を踏まえ、歴史的な庭園の環境教育への効果を検討するものである。植物や昆虫などを観察した経験の有無を調べ、先行研究で指摘した庭園のビオトープとしての役割が機能しているかについて明らかにするものである。

⑤ 質問5 校庭で植物や昆虫をとったことがありますか？

質問5は、質問4と同様に著者らの先行研究を踏まえ、歴史的な庭園の環境教育への効果を検討するものである。特に、植物や昆虫などを観察だけでなく、採集したりする経験の有無を調べ、先行研究で指摘した庭園のビオトープとしての役割があることを再確認するものである。

⑥ 質問6 校庭で拾った木や葉っぱなどを工作などの材料に使ったり、花束などを作って遊んだりしたことはありますか？

質問6は、庭園が子ども達の学校生活や学習にどの様に関わってくるかについて検討するために設定した質問項目である。歴史的な庭園の教育的な機能については、先行研究でビオトープとしての機能があると指摘した。それに関して、質問4及び質問5を行なっているが、環境教育だけでなく幅広い教育活動へ広がることを検討するものである。環境学習の取り組みは、学校における教科理科や総合学習・特別活動として実施される。ただ、それだけでなく、他教科などとの関連性を分析すること

としており、このため、庭園で採集した木々や花を造形活動に生かすことは、環境学習の範囲を超えた多様な学習へ広がっていることを示している。

⑦ 質問7 学校の自然について、作文や日記に書いたことはありますか？

質問7は、質問6と同様の視点から設定した。庭園について日記・作文として記録したことがあるかについて知ることで、環境学習の範囲を超えた多様な学習へ広がっていることを検討しようとするものである。

⑧ 質問8 植柳小学校の栽柳園の歴史について少しでも知っていますか。

質問8は、植柳小学校栽柳園の歴史を子ども達が知っているかについて把握するためのものである。このことは、社会科などにおける郷土学習と栽柳園の関係を検討する際に必要な資料であると考えられる。

⑨ 質問9 栽柳園やその周りの風景を絵にかいたことはありますか？

質問9は、子ども達にとって栽柳園がどのような存在であり、学校における思い出やシンボルとしての価値を有しているかについて、風景画として描くことや日記に記録する行為の有無から検討するために設定した質問である。

(3) アンケート回答結果

① 質問1

質問1は、「自然の中でよく遊んだりしますか。」という内容で、子ども達の自然体験活動の状況を問うものであった（表3参照）。自然体験は、4年生から6年生まで過半数が「ある」を回答しており高い傾向を示している。ただし、4年生・5年生では男女間の差が生じている。4年生では、女子が「ある」と「ない」の差がたった1名であり、自然体験が特に高いとはこのアンケートでは言えない。5年生では、男子の「ある」

表3. 質問1：自然の中でよく遊んだりしますか

学年	4年		5年		6年		合計 (人)
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
ある	17 (85%)	9 (47%)	9 (43%)	12 (71%)	23 (96%)	13 (100%)	83 (73%)
ない	3 (15%)	10 (53%)	12 (57%)	5 (29%)	1 (4%)	0 (0%)	31 (27%)

表4. 質問2：休み時間は校庭でよく遊びますか

学年	4年		5年		6年		合計 (人)
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
ある	11 (55%)	16 (84%)	8 (38%)	8 (47%)	22 (92%)	7 (54%)	72 (63%)
ない	9 (45%)	3 (16%)	13 (62%)	8 (47%)	2 (8%)	6 (46%)	41 (36%)

回答が過半数を割っているが、女子では逆に「ある」が大きく増えている。低下については、上級生になったことによって各種活動が増加することによって、自然体験が時間的に制約されてしまっていることが考えられる。ただし、4年生から5年生において比率が逆転し、6年生では4年生と同等の傾向を示している。この2度の逆転現象となっている理由は不明である。

② 質問2

質問2は、「休み時間は校庭でよく遊びますか。」と言う内容で、休み時間における児童の校庭での活動の有無を質問している（表4参照）。学年間の高低はあるが、半数を超える児童が「ある」と回答している。ただし、5年生では、質問1と同様の傾向があり、校庭における活動が他の2学年より低調であることが明らかになった。ただし、6年生男女児童においては、ほとんどの児童が休み時間に校庭でよく遊んでいると回答している。このことから、植柳小学校の児童は、校庭で積極的に遊んでいると考えられる。

③ 質問3

質問3は、「休み時間はどこで過ごしますか？場所を教えてください。」と休み時間における校庭での活動場所について複数回答を求めたものである（表5・6・7参照）。子ども達が実際に遊んでいる場所について明らかにするものである。この項目では、学年毎の特徴が大きいことが明らかになった。4年生から6年生へと学年が進行するにつれて校庭における活動範囲が広がっていくことが明らかになった。これは、選択している場所とその数の増加が示している。4年生は、男女とも校庭内の1カ所をあげる児童がほとんどであった。4年生男子ではグラウンドを、女子では中庭を回答している児童ほとんどであった。しかし、それが、5年生を迎えると回答が高まっていくことになる。5年生では38名中18名、6年生では37名中36名が複数選択をしている。また、複数回答が多くなるので当然選択された場所も増えていくことになる。4年生では、複数回答をした児童でも概ね2カ所程度だった。しかし、6年生では半数以上の児童が4カ所以上を選択している。このように、学年の進行に伴い児童の校庭内における行動範囲が広がっている。

④ 質問4

質問4は、「校庭で植物やこん虫を観察したことがありますか？」と植物や昆虫を観察した体験について聞いた質問である（表8参照）。この質問については、いずれの学年・男女においても高い回答水準を得られた。なお、アンケート調査に関する事前調査においても学校側から本件については指摘¹⁶⁾があった¹⁷⁾。

⑤ 質問5

質問5は、「校庭で植物やこん虫をとったことがありますか？」として校庭内の植物や昆虫の採集について質問を行なった（表9参照）。質問4の結果を含めて子どもの行動が、観察だけでなく採集するなどの実際の行動に広がっているか、繋がっているかについて把

握しようとしたものである。結果としては、4年女子児童において、「ある」という回答が低く、「ない」が上回っている。しかし、それ以外の学年・男女では、「ある」が圧倒的に高い状況となっている。子ども達が、自然環境の中で昆虫や植物の採集などに進んで取り組んでいることが明らかとなった。

⑥ 質問6

質問6は、「校庭で拾った木や葉っぱなどを工作などの材料に使ったり、花束などを作って遊んだりしたことはありますか？」という質問である（表10参照）。質問4及び質問5を踏まえ、採集した木々や花などといった校庭の自然物を、造形の材料として活用して学校の図工の時間や日々の学校生活での遊びの時間などで活用しているかという質問である。これについては、4年男子で「ない」という回答が若干高い比率となった。しかし、全体としては、「ある」という回答が圧倒的な比率となった。

表5. 質問3：選択した場所

学年 性別	4年		5年		6年		合計 (人)
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
厳整の森	1	3	8	11	18	12	53
築山周辺	2	1	3	1	14	8	29
旧講堂周辺	0	3	3	8	10	11	35
体育館周辺	3	1	6	2	20	7	39
グラウンド	19	3	16	9	22	7	76
中庭	4	11	5	1	14	10	45
その他	0	2	1	0	0	0	3

複数回答のため回答者実数に合わない

表6. 質問3：選択した場所

学年 性別	4年		5年		6年		合計
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
厳整の森	5%	16%	38%	65%	75%	92%	46%
築山周辺	10%	5%	14%	6%	58%	62%	25%
旧講堂周辺	0%	16%	14%	47%	42%	85%	31%
体育館周辺	15%	5%	29%	12%	83%	54%	34%
グラウンド	95%	16%	76%	53%	92%	54%	67%
中庭	20%	58%	24%	6%	58%	77%	39%
その他	0%	11%	5%	0%	0%	0%	3%

表7. 質問3：選択した場所

学年 性別	4年		5年		6年		合計 (人)
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
0	0	2	1	0	0	0	3
1	15	12	11	8	1	1	48
2	2	4	6	6	3	0	21
3	2	1	0	2	5	5	15
4	1	0	0	0	5	1	7
5	0	0	0	0	4	1	5
6	0	0	3	1	6	5	15

⑦ 質問7

質問7は、「学校の自然について、作文や日記に書いたことはありますか?」として、学校の自然についての表現活動への展開を聞くため、作文や日記への記載を聞いた(表11参照)。全体的に「ない」という回答が高い状況であり多数派となった。4年生では、「ない」回答が高く、男子では、全員「ない」と回答している。6年生男子において「ある」回答が、「ない」回答に迫っているのみであった。しかし、4年生から6年生への変化をみると、徐々に学校の庭園を文章表現の題材として意識してきていると考えられる。

⑧ 質問8

質問8は、「植柳小学校の栽柳園の歴史について少しでも知っていますか。」というもので、植柳小学校の校庭の中核となる栽柳園の歴史について、どれくらい知っているかについての質問である(表12参照)。この点についても4年生の児童では、低い状況であったが、上級生である6年生ではそのほとんどが、栽柳園の歴史を知っている状況となっている¹⁸⁾。

⑨ 質問9

質問9は、「栽柳園やその周りの風景を絵にかいたことはありますか?」というものであり、これまでの質問を踏まえて、栽柳園やその周りの風景を描く対象として栽柳園への興味関心が広がっているかについて明らかにした(表13参照)。4年生では「ある」回答が全くない。しかし、6年生になると栽柳園を題材とした表現を行なう機会が増えていると思われる。ただし、子どもの庭園との活動との関連性は確認出来なかった。

5. 歴史的庭園の教育への可能性

(1) アンケート結果の傾向

① はじめに

歴史的な庭園の教育への活用の可能性を、アンケートから検討してみる。既に、先行研究では歴史的な庭園の教育の可能性について指摘した。その中では、3つの中核となる教育的要素を指摘している。それは、「歴史学習の効果」「文化・芸術学習の効果」「環境学習の効果」としてあげている¹⁹⁾。また、本稿では、環境学習、郷土学習、体育活動、表現活動の視点も指摘している。歴史的な庭園が、どのような教育的な特徴を有しているかについて、これら視点も含めながら分析を行う。

② 自然体験の充実

アンケートでは、子ども達が、自然体験が豊富であると回答している。また、植物や昆虫の観察・採集などを行なっていると回答した児童数の比率が高いことが明らかとなった。児童の自然体験の豊富さは、アンケート以外にも見ることができる。子どもが学校の虫かごを持ってくることは、良くあるとのことである。しかし、通常は、小学校に子どもが虫かごを持って登校する場合には、子どもが自宅などで採集した生き物

表 8. 質問 4: 校庭で植物やこん虫を観察したことがありますか?

学年	4年		5年		6年		合計 (人)
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
ある	19 (95%)	17 (89%)	16 (76%)	15 (88%)	19 (79%)	9 (69%)	95 (83%)
ない	1 (5%)	2 (11%)	5 (24%)	2 (12%)	5 (21%)	4 (31%)	19 (17%)

表 9. 質問 5: 校庭で植物やこん虫をとったことがありますか?

学年	4年		5年		6年		合計 (人)
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
ある	18 (90%)	11 (58%)	16 (76%)	16 (94%)	22 (92%)	8 (62%)	91 (80%)
ない	2 (10%)	8 (42%)	5 (24%)	1 (6%)	2 (8%)	4 (31%)	22 (19%)
その他	0	0	0	0	0	1	1

表 10. 質問 6: 校庭で拾った木や葉っぱなどを(以下略)

学年	4年		5年		6年		合計 (人)
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
ある	11 (55%)	15 (79%)	17 (81%)	17 (100%)	21 (88%)	12 (9%)	93 (82%)
ない	9 (45%)	4 (21%)	4 (19%)	0 (0%)	3 (13%)	1 (8%)	21 (18%)

表 11. 質問 7: 作文や日記に書いたことはありますか?

学年	4年		5年		6年		合計 (人)
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
ある	0 (0%)	4 (21%)	2 (10%)	6 (35%)	11 (46%)	4 (31%)	27 (24%)
ない	20 (100%)	15 (79%)	19 (90%)	11 (65%)	13 (54%)	9 (69%)	87 (76%)

表 12. 質問 8: 栽柳園の歴史について少しでも知っていますか?

学年	4年		5年		6年		合計 (人)
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
ある	8 (40%)	4 (21%)	16 (76%)	14 (82%)	19 (79%)	9 (69%)	70 (61%)
ない	12 (60%)	14 (74%)	5 (24%)	3 (18%)	5 (21%)	4 (31%)	43 (38%)

表 13. 質問 9: 絵にかいたことはありますか?

学年	4年		5年		6年		合計 (人)
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
ある	0 (0%)	0 (0%)	6 (29%)	3 (18%)	15 (63%)	9 (69%)	33 (29%)
ない	20 (100%)	19 (100%)	15 (71%)	14 (82%)	9 (38%)	4 (31%)	81 (71%)

を学校の先生や同級生に見せるために持ってくる。しかし、植柳小学校の場合には、その逆であるとのことである。植柳小学校の児童の場合は、学校内で生き物を採集するために網や虫かごを持参し登校している。休み時間になると多くの子ども達が、虫取り網や虫かごを持って校庭で生き物を追いかけているとのことである²⁰⁾。アンケートとこれらの様子を考えると、子ども達は、栽柳園の優れた自然環境の中で、充実した自然学習を体験していると考えられる。

③ 子どもと庭とのかかわりの密接化

アンケート結果では、4年生と6年生には、校庭との関わり方に大きな特徴の違いがあった。それは、校庭との関わり方の変質である。アンケート結果によれば、子ども達の校庭の関わりは、4年生段階においては、校庭内の自然との関わりが中心となっている。4年生の児童にとっては、校庭を自然観察や自然体験の場となっている。一方で、6年生の児童においては、校庭が単なる自然観察や自然体験の場でなくなっている。校庭との関わりが、深まり様々な学習へ展開しているのである。この傾向は、5年生から見ることができる。5年生では、造形体験があると回答した児童が増えている。そして、6年生では作文などで残すことや絵の題材などとするようになっていく。また、栽柳園の歴史についても知っているという回答した児童が増えている。

(2) 学校教育への関連の可能性

これらを実際の学校教育における教科や教育活動に分類していくと、次のような教科や教育活動において可能性が出てくる。理科・社会科・国語・図画工作・特別活動（遠足・修学旅行）・総合学習などがある。これらについて、アンケート結果を踏まえて検討を行う。

① 理科

理科（および環境教育）への展開については、先行研究にて指摘している。今回のアンケートでは、子どもが歴史的な庭園に積極的に関わっていることから、環境学習の機能が明確化したと考えられる。そもそも植柳小学校は、球磨川河口に面した地域で有り、市街地の一部と言っても自然環境は周りにある程度ある²¹⁾。しかし、校庭に自然環境が整っていることは、子どもの自然体験に大きな影響を与えている。校庭での活動が高まっている児童の回答を分析したところ、生き物の観察体験や採集体験が高い状況になっている。歴史的な庭園のビオトープ的な役割を証明することとなっている。そして、歴史的な庭園が、校庭にあることが子ども達の自然体験を高め、理科・環境教育へと発展していくことになると思われる。

② 社会科

社会科との関わりも指摘できる。質問8の栽柳園の歴史などを知っているかについても質問した。学校の日々の教育活動において栽柳園の紹介を行っていたこともあり、回答は5年生と6年生で「知っている」が高い状況となった。5・6年生の「知っている」回答が、高い状況になったのは、子ども達にとって歴史的な庭

園に対する興味・関心があるていどあるから思われる。このことは、社会科の地域学習や歴史学習への広がりや題材としての活用が期待できることを意味している。

③ 国語

歴史的な庭園に深くかかわっている場合に、そこでの体験などを日記や作文に書くことが考えられる。作文などは、各題材があることで成立するものであり、その体験によって国語力は向上すると考えられる。このため、歴史的な庭園が、日記や作文の題材として多く選択されていけば、国語力の向上につながると考えられ、国語の領域でも庭園が有効な題材となることを示している。しかし、アンケート結果においては、日記や作文への展開は弱い状況であった。

④ 図画工作

多くの子ども達が、木や葉っぱ・花を採集して造形活動を行っていた。また、5年生と6年生段階では、さらに風景などを絵に描く、行動に広がっている。木々などを造形活動に用いることは、図画工作の教育活動に繋がることになる。また、それが、絵や文章による表現活動が行なわれるようになる。このことは、歴史的な庭園が表現活動を促す効果を有していることを示すものである。

⑤ 体育科

歴史的な庭園の教育効果は、体育科についても考えられる。歴史的な庭園は、自然環境が豊富であり、このことが子どもたちの外で運動などの活動を行う機会を促すことが考えられる。このことは、運動能力の向上の観点からも重要となる。本アンケートだけでは、検証できないが、子どもが校庭で活発に活動を行なうことが運動能力の向上と関係することも1つの仮説として指摘できる²²⁾。

⑥ 特別活動

特別活動は、戦後の自由研究として始まった教育活動である。現在の特別活動は、学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事の4つの領域から構成される教育活動となっている。学習指導要領の改訂に伴い名称や内容の変更が行なわれているが、小学校では1968年の学習指導要領改定時に現在の形態となった。特別活動の時間は、総合学習よりも先行していること、学級活動や学校行事が含まれており、教師や学校における創意工夫が行ないやすい特徴がある。歴史的な庭園は、学校行事などの機会に活用されること考えられる。ただし、今回のアンケートにおいては、それに関係する質問を設定できなかった。このことから、これについては課題として継続して研究していく必要がある。

⑦ 総合学習

総合学習は、学習指導要領改訂によって小学校・中学校では平成14年、高校では平成15年から実施された教育活動である。総合学習は、平成8年の中教審答申や平成10年7月の「教育課程審議会答申」において、「各学校が創意工夫を生かした特色ある教育活動を

展開できるような時間を確保」し「社会の変化に主体的に対応できる資質や能力を育成するために教科等を超えた横断的・総合的な学習をより円滑に実施するための時間を確保」する観点から、「総合的な学習の時間の創設の提言」がだされたものである²³⁾。この総合的な学習は、各学校の自由な内容設定により行なわれることになった。また、新学習指導要領においても維持される見込みである。特に、現在改訂作業中の次期学習指導要領では、高校などでは発展的な内容に改訂される見込みであり、さらなる発展が期待される教育活動である。歴史的な庭園は、この教育活動において多様な教材を提供することができよう。代表的なものとしては環境学習や郷土学習が考えられる。

⑧ 学校における教育全般への展開

歴史的な庭園は、既に筆者らの先行研究において指摘した理科・環境教育だけでなく、総合学習・特別活動、また教科については図画工作・国語・社会科の学習において有効であると考えられる。その他生活科・家庭科などにおいても教育効果があると考えられる。このことは、学校にある資源を教材として活用する大きな機会となっている。歴史的な庭園は、総合学習や各種学校行事において活用できる資源である。実際、植柳小学校においても学校行事の折に触れて栽柳園について紹介することや総合学習における活用などの検討が行なわれている²⁴⁾。

6. おわりに

(1) 歴史的な庭園の教育力

本研究では、歴史的な庭園を対象として学校教育との関係について分析を行なった。今回は、先行研究を踏まえ植柳小学校の在籍する子ども達へのアンケート調査を行ない、その結果を分析することとした。結果としては、子ども達は栽柳園を中心とした学校の自然環境の中で活動していることが明らかになった。さらに、学年の進行によってその関わり方も深化していることが明らかになった。それは、4年生段階では自然観察が中心だったものが、5年生・6年生になると校庭の木々・花などを用いた造形活動、絵に描く・文章で表現するなど、関わり方が多様となっているのである。ただし、庭園と関わるのが、絵や文章で記録することとの関係性を明らかにすることは出来なかった。この点については継続課題となる。

本研究では、これらのことを踏まえながら、歴史的な庭園の教育力について指摘したい。アンケートの分析の中でも指摘しているが、筆者らの先行研究では理科教育・環境教育での意義を中心に展開した。しかしながら、歴史的な庭園は、子ども達の諸能力を育てていく視点においては、この理科教育・環境教育の枠組みだけでは終わらないことは明らかである。前章において歴史的な庭園の教育力を、総合学習や特別活動といった教育活動、図画工作・国語・社会科といった教科の学習に置いても検討した。歴史的な庭園は、これら教科学習においても有効な役割を果たすのではない

かと考えられる。これらについては、実際の学力向上など智含めてさらなる検討を行なっていく必要がある。

(2) 教育実践への展開の課題

前項において教科学習との関連性について指摘した。しかし、本研究を始めるにあたり、学校教育の課題も指摘している。今回は、これらを踏まえて、子どもの日常生活における歴史的な庭園との関わりとの関係から分析を行なった。本研究では、歴史的な庭園の教育効果として環境学習、郷土学習、体育活動、表現活動の要素があり、これらが各種教科へ拡大する可能性を指摘した。しかし、この教科との関わり合いは、ただ子ども達が歴史的な庭園に関われば高まるものでないことも本アンケートで指摘できる。例えば、表現活動であるが、学年が上がるにつれて活動を行なっている子どもの比率は高まるが、圧倒的な差とは言えない状況である。歴史的な庭園があることによって、表現活動の意欲や機会が一層高まり、回答が高くなることも考えられたが、そこまで至っていないことが明らかになったのである。これは、学校生活中で第3者からの働きかけが必要になることを意味している。第3者からの働きかけがあれば、より表現活動などが活性化することが考えられる。これは、子ども達の言語や図画工作的な分野での表現力形成を促すもことになる。これらは、教職員だけでなく、家族なども十分に可能性がある。しかし、学校における教科教育では、教師の働きかけやそれらの活動と教科をつなげる役割が重要になる。

これらのことから、歴史的な庭園には、教育的な活用の可能性は高いが、その教育的な価値を高めるは教職員や家族などの働きかけが重要になる。また、教師が、歴史的な庭園の教育的価値を、どのように活かして教科学習へつなげ・発展させるかも重要になると思われる。

(3) 今後の課題

今後の課題は、前2節で指摘した、歴史的な庭園と学力の関係や歴史的な庭園をどのように学力に結びつけるかに加え以下の事項が考えられる。

先行研究では、代々の卒業生の栽柳園への思いについて100周年記念誌を参考にして分析を行なった。今回のアンケートにおいては、栽柳園への直接の思いについては調査できなかった。また、歴史的な事項への関心も他の回答と比較すると高くなく十分な検討が出来なかった。このため今後の研究では、歴史的な庭園が、学校と地域社会をどのように結ぶものとなるかについても研究を進める必要がある。特に、卒業生達が栽柳園への強い思いを持っていることが明らかとなっている。この思いが、子どもたちの学校生活の中でどのように形成されるかは重要な視点になる。

また、この栽柳園に対する思いが、地域住民の学校への参加などを推し進める要素となるのではないかと考えられる。この点について明らかにすることは、歴史的な庭園が教育の題材としてのみ有効なのではなく、地域社会と学校をつなげる媒介者としての機能を果たし、さまざまな部分で教育力を有していることを

示すことになる。

これらを明らかにすることは歴史的な庭園が、学校に在学する児童のみの教育的効果に留まらないことを意味することになる。歴史的な庭園が、地元住民への教育的な効果があることを示すことになる。また、歴史的な庭園が、教育だけでなく地域社会の人間関係構築・発展に寄与する可能性も有している。このことは、本論文冒頭で指摘した庭園の機能や目的として指摘した、人の心を和ませる・住環境の改善・文化活動の拠点・生活に関わる資源を得るに加えて、教育や地域社会の拠点という、新しい機能を提起することになる。このことは、歴史的な庭園の価値を、正しく評価することに繋がる。そして、長い年月の中で維持管理が困難となってきた歴史的な庭園が、次の世代へ継承されていく根拠となることも意味している。このような視点から、著者らは今後も歴史的な庭園の教育力に着目した研究を行なっていきたいと考える。

要 旨

本論文では、歴史的な庭園の教育的な価値について研究を行なった。小学生を対象として、歴史的な庭園との日常生活における関わりについてアンケート調査を行なったものである。歴史的な庭園と小学生の関わりは、学年が進行するとその関与の度合いが高まっていることが明らかになった。また、関わり方を分析することによって、環境学習だけでなく、郷土学習・体育活動・表現活動に広がることで関係する教科の学習においても教育的な価値があることを指摘した。一方で、学力との関係、教科学習との関連性の形成、卒業生の庭園への思いの背景、地域作りへの還元などについては今後の課題となった。

謝 辞

本報告は、熊本県八代市立植柳小学校校長久保明博先生はじめ教職員の皆様のご協力により可能となった。この場を借りて感謝申し上げる。

注 釈

- 1) 中央教育審議会，答申，「我が国の高等教育の将来像」，平成17年1月28日。
- 2) 木々の実や葉っぱは食用に、池水の水を生活用水に活用するなど歴史的な庭園は鑑賞のみの機能ではない。
- 3) 植村ら，「歴史的庭園と学校教育（その1）－熊本県八代市植柳小学校の事例から－」，南九州大学研究報告第46A号人文社会科学編，平成28年4月，1～11ページ。
- 4) 社会科（歴史系）を主に学習した教員は歴史的な背景について，理科（生物学）を主に学習してきた教員は自然的な内容について，指導が可能と思われるが，学校のごく一部の教員ではない。
- 5) 植村ら，「歴史的庭園と学校教育（その1）－熊本県八代市植柳小学校の事例から－」，南九州大学研究報告第46A号人文社会科学編，平成28年4月，1～11ページ。同上。
- 6) 植柳小学校校長先生の発言（8月調査時のコメント）。
- 7) 麦島小学校との統合の際には，名称及び校地は植柳小学校を使用したので，新設統合ではなく，麦島小学校廃校と校区・児童の植柳小学校への統合に近かったようである。ただし，統合に際しては，新しい学校を作るということから，山田耕筈・北原白秋に校歌の作曲作詞を依頼している。
- 8) 植柳小学校校長先生の発言（8月調査時のコメント）。
- 9) 植村ら，「歴史的庭園と学校教育（その1）－熊本県八代市植柳小学校の事例から－」，南九州大学研究報告第46A号人文社会科学編，平成28年4月，5ページ。
- 10) 当時は，植柳村であった。
- 11) 植村ら，「歴史的庭園と学校教育（その1）－熊本県八代市植柳小学校の事例から－」，南九州大学研究報告第46A号人文社会科学編，平成28年4月，5～8ページ。
- 12) 植村ら，「歴史的庭園と学校教育（その1）－熊本県八代市植柳小学校の事例から－」，南九州大学研究報告第46A号人文社会科学編，平成28年4月，2～5ページ。
- 13) なお，この点については，植柳小学校だけでなく八代市の郷土教育において有効と思われる。八代市には，八代城跡・松井氏別邸の松浜軒があるが，これらと共に活用する価値は大いにあると思われる。
- 14) 当初は，新年度早期に実施したいところであったが，4月の熊本地震に配慮して実施を2学期以降に行なうことにした。
- 15) 栽柳園は，中心に池泉があることから児童の安全上立ち入り禁止にしている部分がある。このため，低学年における生活課の学習などで活用がなされているのみであるという。
- 16) 本件については，「5. 歴史的庭園の教育への可能性（1）アンケートの結果（2）自然体験の充実」において詳しく指摘している。
- 17) 植柳小学校校長先生の発言（8月調査時のコメント）。
- 18) これは，植柳小学校において学校行事などを通して栽柳園の価値を伝える教育活動を行なっていることの成果でもある。
- 19) 植村ら，「歴史的庭園と学校教育（その1）－熊本県八代市植柳小学校の事例から－」，南九州大学研究報告第46A号人文社会科学編，平成28年4月，2～5ページ。

- 20) 植柳小学校教頭先生の発言。(8月調査時のコメント).
- 21) ただし、球磨川は、一級河川に指定された熊本県最大の河川である。このため、水難事故防止などの観点から河川敷などで遊ぶことは制限されている。
- 22) 校長先生によると植柳小学校の児童は行動的であり、活発に外で活動を行なっている。そして、運動能力にも優れており、運動能力向上などで学校が表彰されている。これは、自然豊かな学校の環境や教職員の関与による成果ではないかと考えている。(8月調査時のコメント)
- 23) 中央教育審議会 第一次答申、「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」、平成8年7月19日。教育課程審議会答申、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課

程の基準の改善について」、平成10年7月29日。

- 24) 植柳小学校校長先生・教頭先生の発言。(8月調査時のコメント)

引用文献

植村秀人, 永松義博, 川信修二, 歴史的庭園と学校教育(その1) -熊本県八代市植柳小学校の事例から- 南九州大学 南九州大学研究報告第46A号人文社会科学編 平成28年4月

本研究は、JSPS 科学研究費助成事業(基盤研究C) 課題番号15K07834の助成を受けて行った。

